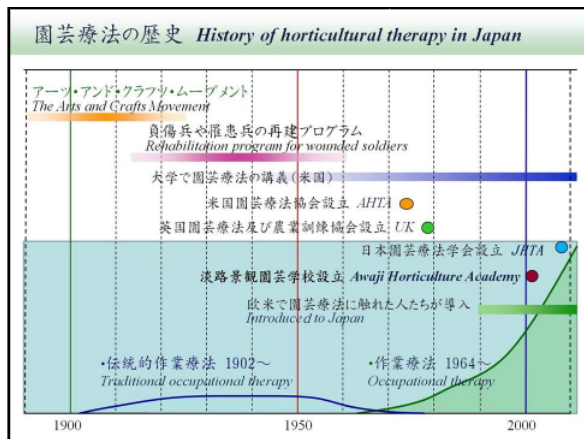


もともと世界的に見ると、生活をもう少し活動的に、芸術活動等を含めて活性化しようという動き、アート&クラフトムーブメントが起きました。その後、世界を巻き込んだ戦争で負傷された兵隊さんを生活に戻すための再建プログラムが実施されました。作業療法士だけでは足りませんので、いろいろなアクティビティを用いる多くの方たちが来られました。その中で植物を扱う人たちが生活の再建に参加をされました。その人たちが専門的に育てようという動きがあり、大学での園芸療法の講義が、1940から50年ぐらいのアメリカを中心に始まりました。アメリカの園芸療法協会は1974年に設立され、78年に英国でも設立されました。



日本での植物を用いるかかわりは、伝統的な作業療法という形で、1902年に始まっています。まだ世界的には薬物療法などが始まっていない時期に植物を通して健康を回復しようという動きがありました。その流れを受けて、1960年ぐらいから少しずつリハビリテーションが大事だということで、日本の政府が優秀な人をアメリカに派遣して、リハビリテーション、特に作業を用いて治療をするという技法を学ばせました。作業療法の作業にはいろいろな科目があり、その中に園芸と音楽というのが元からありました。兵庫県ではこの2つを取り上げて、兵庫県の中だけの組織をつくられました。とてもすてきな取り組みだと思っています。

欧米で園芸療法に触れられた先駆的な人たちが、1990年ぐらいに園芸療法を日本にも取り入れ

ひとと植物の関係から
Relationship between humans and plants



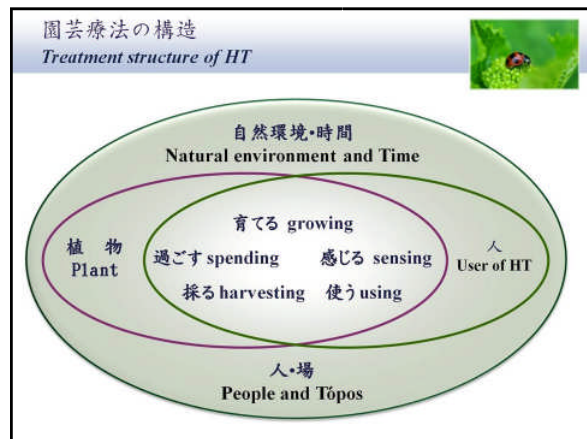
生食連鎖 Saline chain
 緑色植物 → 草食動物 → 小型肉食動物 → 大型肉食動物

腐食連鎖 Detritus food chain
 有機堆積物 → 動植物 → バクテリアや菌類 → 腐食者 → 肉食動物

光合成 Photosynthesis
 $二酸化炭素 + 水 + 光エネルギー = ブドウ糖 + 酸素$

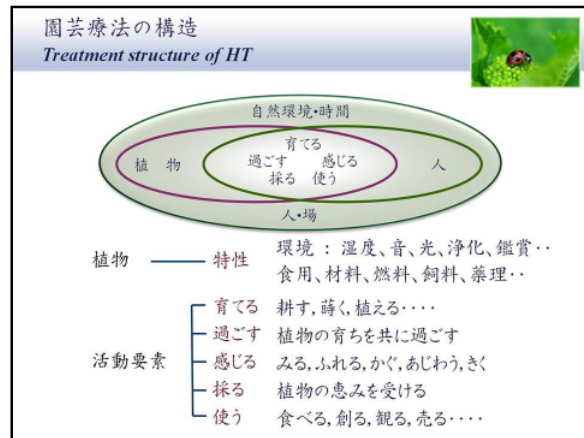
人間にとって植物は、栄養、ビタミン、酸素、水資源
Plant means nutrition, oxygen, and water resources for humans

たらどうかと提案されました。ただ、これまでに日本で園芸療法という言葉を使ってこなかったのは、一つは植物を用いるかかわりが伝統的な作業療法という形で行われてきたから、もう一つは、日本は世界で一番植生の豊かな国であるため、緑が余りにも身近にあつて、それを使って健康を回復することを考えてなかったからです。世界的に見ると、園芸療法が発達したところは、実は植生が非常に少ないところや自然の過酷なところです。多分、生活の中に緑をといる人々の気持ちが療法

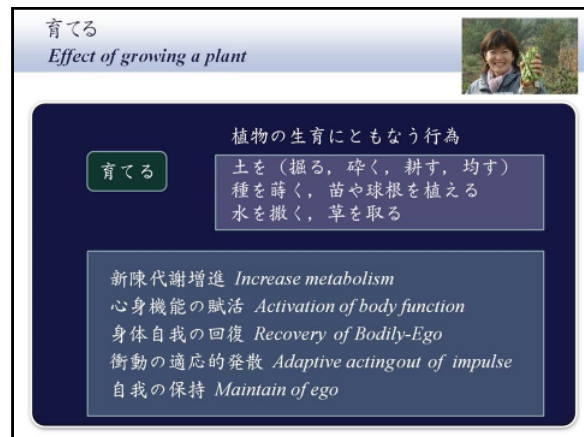


という形を膨らませたと思います。日本では自分たちの身の回りにある植物をこういうふうにかせばもっと健康に生活できるんだというのが分かって、広がり始めました。この淡路景観園芸学校で園芸療法のコースが設立されたのが2002年。日本園芸療法学会が設立されたのが2008年です。組織としては始まったばかりですが、植物と人間の関係は、人間がこの世界に生まれたときから始まっているわけですから、新たに研究するのではなく、我々が生活の中で植物とどうかわつ

てきたかということを見直していけば、その中に全ての根拠があります。人間や動物が生きる一番のものは植物です。植物が全ての栄養素と酸素をつくり出しています。この厳然とした事実が一番重要であり、これを抜きにしてエビデンスはありません。

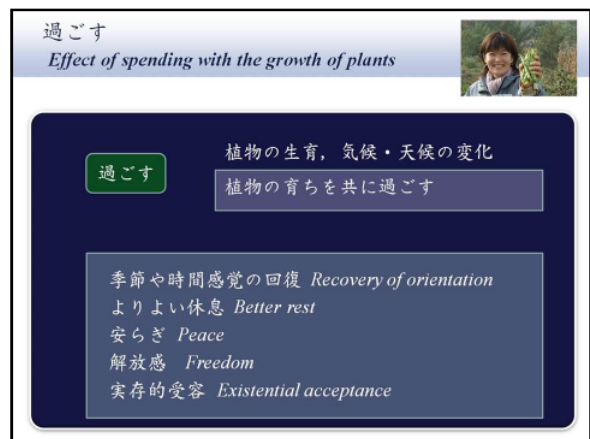


園芸療法を作業療法の視点から見ると、人が植物を利用するときに行き起る行為というのは、育てる、過ごす、感じる、取る、使うという5つの要素に分類できます。この要素の中に人間の機能が全て含まれています。植物を育てて利用するという事は、人間が生きる一番の基盤です。だから我々が持っている感覚運動機能全てを使うのが植物を育てて利用することにあります。植物を育てて利用して、我々人類が延々と続いてきたのですから、犬のようにするどい嗅覚も必要はないし、するどい爪も必要がないわけです。ただ、我々には、植物を育てて収穫して利用するために必要な感覚や運動というのが残っているのです。逆に言えば、植物を育てることを通して、我々の心身の基本機能を改善したり、維持したりすることがで



きるはずで。この機能を補完代替療法ということで、経験的に使ってきたと思います。

育てるといふ行為は、いろいろなアクティビティの中でもとても重要なことです。植物を育てるためには、土を掘って砕いて耕してならして、種をまいたり、苗や球根を植えたり、水をまいたり、草を取ったりしなければなりません。これらの行為の中には、人間のいろいろな新陳代謝を増進させるような機能がありますし、あわせて心身の機能全体を賦活します。それと身体自我と言って、



私がこうして生きているという一番ベースになる部分がとても大事になってきます。そういうものとか、少し一生懸命体を動かすことによって、気分の転換を図る衝動の適応的発散があります。私はこういうふうにして生きている。自分が手をかけた植物がこうして育ってくれている。この植物は人を生かすものだということが、人間の自我を保ってくれます。そして、過ごすということは、植物の育ちとともに過ごすことで、赤ちゃんを育てて、赤ちゃんと一緒に過ごすのによく似ています。諦めるわけではなく、自分の思いどおりにならないものに、自分の身を任せながら一緒に過ごす。好きなときに好きなようにできるわけではないですから、その植物に合わせるということは、見当識障害の中でも一番重要な時間や季節の感覚を回復します。昔は、思いどおりにならないものがあるから、医療では使えないと言われました。医療の中のリハビリテーションは、365日同じ環境で提供されなきゃいけないと思込んでしまっているのです。これは医療従事者にとっては大